

Title	中堂先生におけるバルザックをめぐって
Author(s)	村田, 京子
Citation	女子大文学. 外国文学篇 中垣恒朗教授退職記念号. 1990, 42, p.11-24
Issue Date	1990-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10466/10503
Rights	

中堂先生における バルザックをめぐって

村田京子

小説の本質とその意義が問い直される時、バルザックの名が必ず引き合いに出される。彼の膨大な作品大系『人間喜劇』は今日に到るまで、様々な角度からアプローチがなされてきた。その作品批評の流れを大きく二つに分けてみるならば、まず、従来の写実主義作家（リアリスト）バルザックという観点に立った批評が挙げられる。バルザック自身、『人間喜劇総序（*Avant-Propos*）』の中で、自分は歴史の忠実な秘書であり、戸籍簿と張り合い、世界をあるがままに描き出すことを目指すと断言している。彼の描く世界はまさに、二千人の、あらゆる階級にわたる登場人物を動員して、19世紀前半のフランス社会の風俗、歴史を忠実に再現したものである。彼は、フランス革命後、自己の能力を十全に発揮できる新しい時代の到来を信じたあの若い世代、結局は時代に裏切られ、「世紀病（*le Mal du siècle*）」に取りつかれたロマン主義者たちと同じ世代に属し、彼らと同じ挫折感を抱きながらも、彼らのように現実から逃避して理想の世界へと空高く舞い上がりはしなかった。あくまでも現実世界に踏み留まり、金権力を振るって社会の覇権を握っていくブルジョワジーの世界を緻密に構成していった。そもそもバルザック自身、新しく台頭してきたこれらブルジョワ階級に属し、父譲りの貪欲な生活力、金銭に対する情熱的な本能の持ち主であった。従って、彼が描くのは、平俗な人間の営む日常茶飯事であり、彼らの身振り、欲望は平均的な寸法の中に据え置かれている。バルザックは金、性、結婚、下層社会という近代社会が抱える問題を、決して美化することなくありのままの姿で描写している。ある時は宗教という美名に隠れた権力闘争が、ある時は、善良な弱者が遺産を狙う腹黒い輩に討ち負かされる

様が、またある時は、腐敗したジャーナリズムの世界が彼の小説の主題となっている。このように、バルザックは近代社会に横たわる諸矛盾を白日のもとに暴き出しているが、それに対して彼自身は、何ら価値判断を下してはいない。そこにあるのは善悪の是非を越えた、現実認識である。フローベールやゴンクール兄弟、ゾラなどいわゆる写実主義及び自然主義作家たちが、バルザックの小説に見たものは、細部描写に終始し、外的世界を敷き写した世界であった。それ故、『人間喜劇』は、当時の人々の風俗、思想、理論を知るうえで欠かせない歴史的資料を提供するもので、現に、マルクスの唯物史論的分析などにも、こうした見方が引き継がれている。ただ、弁証法的唯物論の見地は、『人間喜劇』を単に直接的あるいは間接的資料としてのみ読もうとする危険性を孕んでいる。

こうした実証主義的見方に対し、『人間喜劇』は現実世界のマイクロコスモスでは決してなく、全く別の原理に基づいて創造されたものであるとみなす考えが、19世紀末頃から現れてきた。その提唱者がボードレールで、彼はバルザックを「幻視者 (visionnaire)」と呼んだ。彼は、バルザックの世界を一つの神話体系とみなしたが、その流れをくむ者として、アルベール・ベガン、ジョルジュ・プーレ等の名が挙げられる。『人間喜劇』は一見、具体的な事象の上に確立した堅固な世界のように見えるが、その世界が超自然的な力の介入によって揺らぎ、何かしら夢想の産物であるかのような妙な印象を読者が受ける瞬間がある。バルザックの小説においては、「すべてが世界とその心丈夫の規範についての我々の習慣的イマージュに符合していると同時に、神的なもの、悪魔的なものの中に入る一種の奇異に囲繞されている」(アルベール・ベガン『真視の人バルザック』p. 37) のである。バルザックにあっては、ほんの些細な身振りや顔の表情の変化すら、情熱の迸り出る表徴となり、住居、衣服までもが登場人物の心情を吐露し、彼らの心的変化は自然の景色の変貌によって暗示される。彼自身、『ファチノ・カーネ』の有名な一節で告白しているように、「第二の眼」と自ら呼ぶ直観的な観察能力を備え、外的事物を単に捉えるだけでなく、その原因にまで遡り、深層の原理をも洞察することが出来た。彼の創作態度自体、真夜中に濃いコーヒーの力を借りながら、靈感に導かれるがままに、心の

奥深くから立ち現れる豊かなイメージをただ遮二無二書き写すというもので、そこには神懸りのなバルザックの姿が見出される。彼にとって作家の魂は「世界全体がそこに反映してくる鏡」(Préface de *La Peau de chagrin*) でなければならず、その鏡は宇宙の根源をも映し出すものである。『哲学研究』の中に現れる芸術家達（フレンホーフエル、ガンバラ等）同様、現実の背後にある唯一の、始原の原理＝「絶対」を捉えること、これこそがバルザックが自らに課した問題であった。「絶対」の探究が神の創造の秘密を求めることである以上、それは、神への冒瀆に連なる行為である。創造的な力に与かる瞬間は同時に、死への恐怖、狂気への恐怖が呼びさまされる時でもある。その時、『人間喜劇』は「思考 (pensée)」の過度の行使によって破滅へと導かれていく人間達をあらわした神話と化するのである。

このように、物事を客観的に観察、分析していこうとするリアリストバルザックと、内的世界に沈潜し、主観的に巻き込まれ、神秘主義的な体験をする幻視者バルザックという二つの性向に、彼は常に引き裂かれている。的確な現実意識と幻想性という相矛盾する二面性が奇妙に交錯し、融合した世界が『人間喜劇』を複雑なものとし、ダイナミックな生のドラマを出現せしめている。従って、バルザックの作品を解読するにあたって、常にこの二面性を念頭に入れておかねばならないであろう。

中堂先生の、多年にわたるバルザック研究はまさに、この二面性に立脚した形でなされている。以下、主に、論文の発表された順に取り上げていくことにする。

初期の論文『Balzac と Zulma Carraud』は、バルザックの生涯の良き忠告者であった女友達カロー夫人との関係を、主に書簡を通して丹念に掘り起こしたもので、両者の女性観並びに政治的意見の相違と相互理解の努力を探っている。共和主義者で理想に燃えるカロー夫人は、バルザックの保守主義を度々糾弾しているが、実際は彼は上流階級の腐敗を弾劾する立場に回っている。それどころか、今までの作家が有産階級の出で現実の生活を生きていなかったのに対し、バルザックこそまさに、生活を真に経験した作家であった。そこに彼の思想と現実の乖離が見られる。また彼女は、

彼の俗物性を責めたが、彼はその俗物性を創作行為によって克服しようとしたのであり、生活者バルザックから創作者バルザックへの転換には強制労働の苦しみを伴うことを彼女は洞察できなかった。このような彼の二面性に気付かなかった点に、「諦観的な幸福に甘んじなければならない平凡な生活人」ズルマの限界を見ている。

「バルザックの『トゥールの司祭』について」においては、決定稿に到るまでの題名の変遷に注目し、題名の司祭とは誰かを論じている。この小説では、ピロトール師とトルーベール師という二人の司祭が登場するわけだが、両者はちょうど二つの僧侶の型（親切で穏和な善良型、峻厳寡黙な禁欲型）を代表している。しかも、この二つの型はバルザックの筆によって辛辣な戯画化の域にまで達しているが、別に聖職者に対する批判を意図しているわけではない。また、この小説において、バルザックは一見、失脚したお人好しのピロトールに同情し、悪辣なトルーベールを非難しているかのようだが、必ずしもそうではない。むしろ、自らの置かれている危機的状況を認識できなかったピロトールの愚鈍さを彼は手厳しく非難している。バルザックは善玉、悪玉にはっきり分かれる勧善懲悪の世界を描きはしなかった。彼にあっては、人物事象の善悪の価値判断は明確ではなく、ただ現実認識そのものがそこにある。権力と組織、これこそ彼の作品における重要なテーマであり、組織の力を借りて権力の座を勝ち取ったトルーベールを彼は容認し、宗教においても、カトリシズムが絶大なる組織と権力を有しているが故に、その擁護の立場に立っている。この論文では、そこにバルザックのリアリズムの特質を捉えている。特に、中堂先生が『人間喜劇』を、フローベールの作品世界と違って、確たる中心のない、寧ろ到る所に中心の存在している「不気味に揺れ動く壮大な建築物」とみなしておられるのが、興味深い。

「サミュエル・ロジャーズ『バルザックと小説』を読んで」においては、日本では余り知られていないアメリカ人ロジャーズの著作を紹介している。ロジャーズは、バルザックの創作態度における二面性を、「観察するバルザック」と「観察されるバルザック」に区分し、周囲の社会や自己の内部を冷静に観察するバルザックの傍らに、苦悩するバルザック、死への、狂気

への恐怖を抱くバルザックが存在していることを論証している。更に彼は、バルザックの非凡な記憶力と忘却力に注目している。バルザックは、「経験そのものに随伴している主観的な情緒を、忘却力によって経験内容から除去してしまう」ことができた。あの熱に浮かされたような創作の途中に訪れた死の恐怖、狂気への不安ですら、彼の記憶力によって保存され、材料化され、観念として作品の中に定着してしまっただけでなく、このように、ロジャーズは「観察するバルザック」と「観察されるバルザック」、その上、相反する二つの存在をあたかも自分とは無関係であるかの如く「書く」行為に専念するバルザックという様々な要素が複雑に絡み合ったところに、彼の捕らえがたさの理由を見出しており、中堂先生も、そこに多種多様な『人間喜劇』を解明する手掛かりを認めておられる。

またロジャーズは、バルザックの世界は、典型的な人物だけから構成されているわけではなく、時間と共に変容していく人物を描いたものも存在すると述べ、その例として『田舎才女』の女主人公ディナ・ド・ラ・ボードレを挙げている。このロジャーズの分析をふまえ、詳細に作品の解読を試みたのが、中堂先生の後の論文「バルザック『田舎才女』について」である。この小説では、主人公ディナの情熱は、「自尊心を失わないロマンティックな献身的愛から、罪悪感の付きまとう情欲の奴隷」へと質的に変化し、田舎の社交界を支配し、ロマンティックな詩を書いていた青踏婦人が、世間ずれのした苦勞女への変貌を遂げている。彼女の性格はとらえがたく、変化そのもので、「才女」からただの「女」に墮落したところに、当時流行した中途半端な才媛に対するバルザックの批判が見受けられる。と同時に、彼は「才女」から「女」にすることで、ディナを救ったとも考えられる。彼女が自らの質的变化を可能にすることによって、魅力的な女と成りえたわけで、彼女の生き様が読者に対して異様に鮮明な形で迫ってくるのである。この小説では更に、変化する主人公の傍らに、変化しない二人の人物が配置されている。一人は、ディナの愛人ルストー。彼は怠惰で、人生に倦み疲れ、変化しないように宿命づけられている。彼の存在は、ディナの変化を浮き出させるのに効果的で、彼女とルストーとの関係は「周期的な基底音の上を流れる、不断に進み行き広がり行くメロディー」(ロジャーズ)

といったものを思わせる。もう一人は夫のラ・ボードレ氏。彼は、生来虚弱な醜男で性的不能者である。不能者でありながら、世襲財産確立の為に子孫を残そうという執念深い情熱に取りつかれた「典型」の人物である。美人の妻を娶うことで、男たちが寄ってくる、その結果彼女が浮気をして子供を作ることをただ待ちさえすれば良い。一見、虚弱で無能なこの小男が彼より数段優っている妻を、結局は彼の遠大な計略にからめとってしまう。中堂先生は、ルストーの「周期的な基底音」とディナの「不断に進み行き流れ行くメロディー」に、ラ・ボードレの「やっとのことで聞き取れるくらいの、しかし最後には雷鳴のように爆裂するはずの、恐ろしく不気味な不協和音」を付け加え、彼の怪物的性格を浮き彫りにしている。

また、『田舎才女』には、バンジャマン・コンスタンの『アドルフ』やディドロの作品の影響が見出される。この小説にあっては、バルザック特有の意志や情熱は余り見られず、あるのは愛欲と生活のこせこせした私小説的状況だけである。ここに、『アドルフ』のパロディが見られ、『アドルフ』をより一層凡庸化し、現実的次元に置き換えたのが、ディナとルストーの恋愛関係であると言えよう。

「オノレ・ド・バルザックの都市労働者への見方」においては、バルザックの労働階級に対する態度が、当時のブルジョワジーの考えの反映であると論じている。ブルジョワジーにとって、労働者は素性の知れない連中で、いわば「閉ざされた世界」に生きている。19世紀前半のフランスは、犯罪が恐怖と好奇心で人々の心を強く捕らえた時代で、労働階級に対して偏見を持つブルジョワジーは、この階級を蔑視すると同時に、現存の秩序を脅かす不気味な集団として危険視する傾向にあった。バルザックも同じ観点に立って、労働階級を「醜悪で強力な国民」と呼んでいる。ただ彼は、労働者を単に嫌悪すべきものとして避けたわけではない。『ファチノ・カーネ』や『無神論者のミサ』等の作品の中に登場する労働者たちは、バルザック特有の非凡な観察力によって洞察された、真の生々しい姿を呈している。そこに、バルザックの現実認識の確かさが認められる。

ブルジョワとしてのバルザックを鮮明に打ち出したのが、次に先生が『「人間喜劇」の教訓』において書評を試みられた、André Wurmserの『非

人間喜劇』《*La Comédie inhumaine*》であった。ヴェルムセールは、マルクス主義的見解にたって、バルザックの本質をリアリスト、「資本主義に対する論告作成者」とみなしている。バルザックの明敏な社会認識は、彼が一個のブルジョワとして活躍したところに由来し、「彼の豊饒な精力と逞しい意志力は、当時のブルジョワジーの上昇エネルギーに呼応している」と考え、従来の「中立」を装った伝統的読解を、ヴェルムセールは激しく弾劾している。しかし、バルザックは必ずしもブルジョワの擁護者ではなく、権力への迎合者はむしろ、ゴッティエ等の芸術至上主義を唱えるロマンチスト達であった。バルザックが金銭と人間の関係を暴露したことで、それは自ずから資本主義批判につながる。金銭こそが、政治、経済、ひいては社会の構造を動かす原理として、裏面史を形成しているのである。ヴェルムセールは、バルザックの鋭い現実認識に注目し、彼の作品の中に、歴史的社会的材料だけではなく、信条やイデオロギーに属する事柄まで見出し、現代社会においても『人間喜劇』から教訓を引き出しうることを指摘している。彼のこのようなバルザックの作品分析に、中堂先生も共感を示しておられる。

実証主義的立場から、バルザックが実際に関わり合った事件や人物を取り上げ、彼との関係を研究したのが「ペーテル事件とバルザック」及び「L'Affaire Balzac-M^{me} Hanskaについて」である。「ペーテル事件とバルザック」では、妻と召使を殺害したかどで処刑されたペーテルという男の事件の詳細を追い、バルザックが何故、「思想もイデオロギーも欠如した、凡庸な事件」の弁護に奔走したかを論じている。ここでは、事件を巡る社会的背景やバルザックの思想をふまえた上で、夫としての名誉を死刑の判決よりも優先させたペーテルの頑固さにバルザックが共鳴したこと、また今やブルジョワのものとなった文学を擁護し、社会の支配者となったブルジョワジーを司法の圧力から守ること、そこにバルザックをペーテル弁護に駆り立てた大きな動機を見出している。「L'Affaire Balzac- M^{me} Hanskaについて」では、バルザックが死ぬ直前に結婚したハンスカ夫人との関係、特に彼が息を引き取った晩の彼女の不実への疑惑をめぐる論争に言及して

いる。

「『オラース・ド・サン＝トパンの生涯と不幸』について」は、バルザックの若い頃のペンネームであるオラース・ド・サン＝トパンを主人公に据えた奇妙な小説の分析である。まず、この著の作者であるジュール・サンドーに焦点を当てて、ジョルジュ・サンド及びバルザックとの関係に触れ、次に、小説そのものの内容を詳しく分析している。この「伝記」は、バルザック自身の伝記とは全くかけ離れたもので、フランス人好みのミスティフィケーションと考えられる。が、作品をこれ自体として読むならば、青年作家の恋と野心の挫折というテーマの中に、バルザックやサンドーの個人的な苦悩や絶望が色濃く反映されたものとみなすことができる。この論文では、バルザックやサンドーの青春の苦い個人的体験を見出すと共に、バルザックの後の作品の萌芽をも認めている。

「バルザックの『苦悩研究』」においては、バルザックの二つの小説『ゴリオ爺さん』と『従兄ポンス』におけるペール・ラシェーズ墓場での、二人の青年（ラストニャックとトピナル）の対照的な姿を比較している。一方は社会への挑戦を誓い、新しい人生に踏み出していく若者、もう一方は「喧騒の世界」から身を引き、悲哀に閉ざされて人生の幕を下ろす青年。両者の相違は、潑刺とした個性的人間の熱意がまだ感じられる王政復古時代と、ブルジョワの打算とエゴイズムの蠢くルイ・フィリップ時代という時代背景の違いにあることを、ここで論証している。

「バルザック『金色の目の娘』について」では、「この息苦しいサド風の物語」の背後に、人間の「血の力」のしぶとさと、「社会や国家の権力のあくどさ」を垣間見ている。また、この小説が捧げられているウジェーヌ・ドラクロワ及び、ドラクロワの実の父とみなされるタレーランとの関わりを考察している。

1830年頃、フランスではブリヤ＝サヴァランの『味覚の生理学』をはじめとするフィジオロジー物が流行り、多くの作家が哲学的科学的体裁のもとに、軽妙な題材の作品を出版した。バルザックも例外ではなく、フィジオロジー物の範疇に属するものを幾つか書いた。「バルザックの『おしゃれ

生活論』, 「バルザック『歩き振りの理論』の諸問題」は、そうした作品を扱っている。『おしゃれ生活論』では、バルザックは当代の青年達のダンディな生活について機知に溢れた文章を綴っている。しかし、そこには単に、皮相な格言やアフォリズムだけに還元できないものがある。1830年の7月革命がブルジョワ支配を強めただけに終わり、革命の担い手だった若者達は挫折感、幻滅感を抱いた。その精神的抵抗としてエレガンスが生まれたわけで、若者たちのおしゃれ姿は「閉塞状態の自由が生んだ活気のある、しかし苦渋を蔵した自由主義的世界の現象そのもの」なのだ。『おしゃれ生活論』には世紀病にかかった若者たちの、時代に対する辛辣で嘲笑的な批判の響きが聞こえてくる。しかし、他方、それと矛盾する形で、躍進していくブルジョワジーのエネルギーな好奇心に応え、作者自身、同時代の文明に積極的に参加していこうとする熱意も感取できる。バルザックの本質は、クルティウスの言葉を借りれば、「情熱と客観性の統合」、つまり、現存（プレザンス）と距離（ディスタンス）の二重性にある。

作家の二面性を更に明確に打ち出したのが『歩き振りの理論』である。バルザックは、ここでは「狂人 (le fou)」と「学者 (le savant)」の寓話の形でそれを提示している。その箇所を引用してみよう。

「狂人とは深淵を見つけてそこに落ちてしまう人間のことである。落ちた物音を聞きつけると、学者が物差しを取り出してきて穴の深さを測り、梯子をかけて底まで降りていくと、また地上にとって返す。やおら全世界に向かって、『この穴は深さ千八百二フィートあります。底の温度は地表より二度高い』そう言って、手の泥を払う。そして学者は家庭に戻って暮らす。狂人は独房にこもったまま。両者ともどもやがては死んでゆく。狂人と学者と、どちらが真理に近いのか、そは神のみぞ知る。」(『風俗のパトロジー』p. 91 山田登世子訳)

「学者」とは、物事を科学的合理的に捉え、現場から距離を置く客観的な立場に立った者である。それに対し、「狂人」は不安定な現場に居て、主観的に巻き込まれていく者である。バルザックは両者の間にあって、狂気にひかれながらも狂気を恐れるアンビヴァレントな地点に踏み止まっている。「深淵」に落ちていく「狂人」に共鳴しながらも深淵の淵に留まってお

こうとする「学者」の立場に身を置くこと、これこそが真のバルザックの創作態度であった。『人間喜劇』を作り上げる時も、彼は内部からつぶさに経験された個人生活の諸相を綿密に研究すると共に、全体の展望を見失うことがない。常に「狂人」の視角と「学者」の視角が存在し、この二つの展望の均衡の上に、『人間喜劇』が成り立っている。

「Balzacの〈*Des Artistes*〉と〈*L'Epicier*〉について」においても、「狂人」側の芸術家と、「学者」側の俗人を比較対照しながら、バルザックのとった立場を論じている。〈*Silhouette*〉紙に掲載したバルザックの〈*Des Artistes*〉は、1830年頃の若き芸術家たちの状況を洞察した論文で、俗人から見ればいかに支離滅裂であっても、彼らが創作活動に没頭している時、ある神秘的な力に与かり、超自然的存在に変貌しているのだと芸術家を擁護している。ただ、バルザックは芸術家の使命として、「芸術そのものとしての芸術」(l'art pour l'art lui-même)を培わねばならないとしているが、ゴッティエ等ロマン主義作家とは違って、彼の場合は俗人と張り合う気概が残っていることに注意を促している。〈*L'Epicier*〉という題名を持つ記事も、〈*Des Artistes*〉と同時期にシルエット紙に掲載されたもので、ここではバルザックは、ブルジョワの蔑称として用いられた「エピシエ」を問題にしている。エピシエは物質的幸福のみを追い求める、愚鈍の典型とみなされているが、彼らは社会機構の必要不可欠の歯車である。詩人の夢想だけでは不毛に墮してしまふ、生産することも重要で、労働を担っているのがエピシエなのだ。バルザックのこの記事は、皮肉に満ち、エピシエを礼讃しているわけではないが、他方、芸術家への礼讃一辺倒でもない。ここに、バルザック特有の複眼的装置が働いている。

最後に、「Balzacの『知られざる傑作』の一考察」について。この論文では、*la Pléiade* 新版の『知られざる傑作』の édition critique を担当した René Guise の解釈について疑問提起をしている。従来、Furne 版のテキストが決定稿とみなされてきたが、ルネ・ギューーズは、バルザック生前最後の版 (*Le Provincial à Paris, 2 vol*) に重きをおいている。彼がこの版に執着する最も大きな理由は、Furne 版における Catherine Lescault (フレンホーフエルの画中の裸婦の名前) の扱い、すなわち〈une belle

courtisane, appelée la Belle-Noiseuse》という表現にある。作中にカトリーヌを《vierge》と呼んでいる箇所があり、処女と娼婦という矛盾を解消するために、ギュイーズは《Belle-Noiseuse》の語の消えた上記の版を採用したのである。この解釈に疑問を抽出し、カトリーヌ・レスコーなる人物を解釈したのが、本論である。

まず、Catherine Lescault という名前を問題にし、Lescault がアベ・ブレヴォの「マノン・レスコー (Manon Lescault)」を連想させることを指摘している。マノン・レスコーが、ロマン派文学にしばしば登場した「宿命の女 (femme fatale)」であり、彼女は高貴な面と娼婦的側面、純粹さとしたたかさという二重性を合わせ持っている。この二重性は、カトリーヌ・レスコーにもうかがえるのである。

このように、中堂先生は、カトリーヌ・レスコーという名前にこだわっておられるが、高階秀爾は彼の著『想像力と幻想』の中で、バルザックがわざわざ、フレンホーフェルの画中の裸婦にカトリーヌ・レスコーという現実でありうる名前を与えたことに、作者の大胆な創意を見ている。すなわち、バルザックの時代には、まだ裸婦の存在は神話や物語の世界、寓意像、遠い異国においてしか認められておらず、アングルのオダリスタやティツィアーノのヴィーナス等は、身近な日常世界とは次元の違う別世界のものであるという約束事の枠内で、世間に受け入れられていたのであった。後のマネの「オランピア」のスキャンダルは、マネがその約束事を破って、裸婦を日常の現実世界に連れ込んだために起こったものである。「命名されることによって、裸婦はただの『裸婦』ではなくなり、現実の『裸の女』となる。」(『想像と幻想力』p. 399) この、マネに対する言及はそのままフレンホーフェルにもあてはまる。彼にとって絵画は、生き身の女性を再創造することであり、第二のピグマリオンとなることを目指したのである。

中堂先生もピグマリオン神話に言及されており、この神話には Vénus の介入が存在していること、そしてカトリーヌ・レスコーは、マリア信仰の現れというより、むしろ Vénus (Aphrodite) 崇拝の影響が濃いと指摘されている。フレンホーフェルにおいては、芸術への情熱とカトリーヌ・レスコーという魔性の女への恋情が分かちがたく、彼は、作品と現実の交錯

した狂気の世界に入りこんでいる。更に、カトリーヌ・レスコーのあだ名〈La Belle-Noiseuse〉の意味するものを、Michel Serres の著 *Sarrasine* の中の一節〈comme Aphrodite naît de la mer noiseuse. . . 〉(アフロディテが波のとどろく海から生まれるように)からヒントを得て、「la Belle-Noiseuse とは、エーゲ海の西風吹く、ざわつく波(とどろく波)の上、純白の水泡から生まれた Aphrodite のことではなからうか」と推測している。〈Belle-Noiseuse〉=アフロディテという解釈には、多少論理の飛躍が見受けられるが、非常に頷ける説である。異教の女神アフロディテは「売春の神」としてヘタイラ(娼婦)とも呼ばれ、古代にあっては処女も娼婦も聖なるものとして崇められていた。従って、処女であり、娼婦であるカトリーヌ・レスコーは、ギューイズの言うように矛盾した存在ではなく、二つの性格の融合した神秘的存在と化すのである。

以上、中堂先生のバルザックの作品に関する論文の概略を簡単に述べさせて頂いた。先生の研究方法は、「生成過程(ドゥヴニール)」という言葉を多用されているところからもわかるように、作家バルザックを、彼が生きた時代の社会事情に即して、発生論的に研究されていることに特色があるように思える。また、バルザックの生涯と作品とを関連づけ、その作品が如何にして生まれたのか、その背景を深く探っておられる。特に、バルザックの生きた時代であり、『人間喜劇』の舞台となった王政復古期及び七月王政期のフランス社会の様相に、非常に関心を持っておられ、*Balzac et le mal du siècle* の著者である、Pierre Barbéris の影響が感じられる。先生の論文を年代順に見てみるならば、「狂人」と「学者」の二面性を兼ね備えたバルザックを常に念頭におかれながらも、初期の論文では明確な現実認識を持ったリアリストバルザックを重視されているように思える。それに対し、後期の論文では、扱っておられる作品自体も、神秘主義的傾向の強い『哲学研究』の作品が増え、幻視者バルザックに傾斜されているように見えるが、いかがなものであろうか。ともあれ、中堂先生自身、バルザックが度々言及している「観察家」(正確な科学的観察力と、一瞥して原因に遡る素早い洞察力を合わせ持った者)として『人間喜劇』に臨んでおら

れ、先生の博識に富んだ分析に大いに感銘を受けた。今後とも、先生のさらなるご活躍をお祈り申し上げる次第である。

なお、中堂先生の今までに発表された学術論文は次の通りである。

- | | | |
|---|---------|------------------|
| 「バルザックについて少し」 | 「論究」 | 昭和28年3月発行 |
| 「Balzac と Zulma Carraud」 | | |
| | 「女子大文学」 | 第12号 昭和35年3月 // |
| 「バルザックの『トゥールの司祭』について」 | | |
| | 同上 | 第13号 昭和36年3月 // |
| 「サミュエル・ロジャーズ『バルザックと小説』を読んで」 | | |
| | 同上 | 第14号 昭和37年2月 // |
| 「オノレ・ド・バルザックの都市労働者への見方」 | | |
| | 同上 | 第15号 昭和38年2月 // |
| 「王政復古時代の政治思想の状況」 | | |
| | 同上 | 第16号 昭和39年3月 // |
| 「人間喜劇の教訓 André Wurmser <Comédie inhumaine>」 | | |
| | 同上 | 第17号 昭和40年3月 // |
| 「ルーヴェ『フォブラの恋の物語』について」 | | |
| | 同上 | 第19号 昭和42年3月 // |
| 「バルザック『田舎才女』について」 | | |
| | 同上 | 第21号 昭和44年3月 // |
| 「『オラース・ド・サンニトバンの生涯と不幸』について」 | | |
| | 同上 | 第23号 昭和46年2月 // |
| 「ペーテル事件とバルザック」「現代文学」 | | |
| | | 第6号 昭和46年12月 // |
| 「バルザックの『おしゃれ生活論』の問題点」 | | |
| | 「女子大文学」 | 第25号 昭和48年12月 // |
| 「バルザックの『苦悩研究』」 | | |
| | 同上 | 第27号 昭和50年5月 // |
| 「バルザックの『歩き振りの理論』の諸問題」 | | |
| | 同上 | 第28号 昭和51年4月 // |

「L’Affaire Balzac-M^{me} Hanka について」

「女子大文学」 第31号 昭和54年 3 月発行

「ある小ロマン派の生涯—アントワヌ・フォンタネの場合—」

「甲南女子大学ヨーロッパ文学研究」 第 3 号 昭和54年3月 //

「バルザック『金色の目の娘』について」

「女子大文学」 第35号 昭和58年 3 月 //

「二つのリゾン—モーパッサン『女の一生』とゾラ『獣人』の場合」

同上 第37号 昭和60年 3 月 //

「Balzacの〈*Des Artistes*〉と〈*L’Epicier*〉について—『芸術家』と『俗人』の構造」

同上 第38号 昭和61年 3 月 //

「Balzacの『知られざる傑作』の一考察」

同上 第41号 昭和64年 3 月 //